

医療的ケアのある重症心身障害児と同年代の子どもが共に遊ぶ機会の検討**ー地域住民を対象としたアンケート調査の自由回答分析からー**

○ 杉並区立重症心身障害児通所施設わかば 望月 太敦 (010010)

小澤 温 (筑波大学大学院・000260)

キーワード：重症心身障害児・医療的ケア・インクルージョン

1. 研究目的

近年、障害の有無に関わらず子ども同士が様々な遊びなどの機会を通して共に過ごし、成長していくことが重要とされ、インクルージョンの推進が示されている。しかし、たんの吸引などの医療的ケア（以下、医ケア）を必要とする重症心身障害児（以下、医ケア重症児）は、同年代の地域の子どものと交流する機会は少なく、交流においては公平な参加環境の必要性が報告されている（望月・小澤 2024）。一方で、医ケア重症児と地域の子どもの遊ぶことについて、医ケア重症児の保護者以外の地域の成人（以下、地域住民）の意識を検討している先行研究はあまりみあたらない。そこで、本研究では、就学前の医ケア重症児と地域の子どもの共に遊ぶことに対する地域住民の意識を検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査は、2023年7月22日に重症児を主たる対象としたA児童発達支援事業所が主催した地域向けの夏祭りの来場者に実施した。A事業所と関係しない地域住民の意識を検討するため、来場者全257名の内、未成年者を除いた147名を対象にアンケート調査を行い、医ケア重症児の保護者を除いた135名の地域住民の回答を分析対象とした。質問項目は基本情報として、回答者の年齢、医ケアが必要な子どもの有無を設けた後、「医ケア重症児と関わる機会の有無」は4件法で回答を求め、次に「障害の有無に関わらず日常的に子ども同士が遊ぶ機会」については「全く必要だと思わない」を1、「非常に必要だと思う」を10と表示し、1点から10点までのいずれかの数字で回答を求めた。その上で、「障害の有無に関わらず日常的に地域の子どものと遊ぶ機会をどのように考えるか」について、自由回答欄を設けた。回答方法は、対象者がQRコードからアンケートフォームへ登録するWEB調査（Google form）とした。自由回答分析は、KHCoder ver. 3を用いて階層的クラスタ分析、共起ネットワーク分析を実施した。なお、共起ネットワーク分析については、医ケア重症児との関わる機会の有無と共に遊ぶことの意識との語の関連を検討するため、関わる機会が「非常にあった」「まあまあ、あった」を機会あり群、関わる機会が「ほとんど、なかった」「全くなかった」を機会なし群に分類し、障害の有無に関わらず子ども同士が共に遊ぶ機会の回答については、5点以下を低得点群、6点以上を高得点群に分類した上で、各群を外部変数に用いて分析した。本報告では、自由回答分析を中心に報告する。

3. 倫理的配慮

本研究における調査は、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守した。調査協力者に対しては、研究概要や目的、プライバシーの保護、研究結果の公表等について書面で明示し、

回答をもって同意を得ている。分析においては個人が特定できないように匿名化した。なお、調査時、筆頭発表者の所属先に研究倫理審査委員会が設置されていないため、研究倫理審査は受審していない。本発表において、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

アンケート調査に協力した135名（全参加者）の回答を分析対象とした。医ケア重症児と関わる機会の有無は、非常にあった9名（6.7%）、まあまああった19名（14.1%）、ほとんどなかった50名（37.0%）、全くなかった57名（42.2%）であった。また、日常的に子ども同士が遊ぶ機会の必要性では、1点から10点まで回答があり、全回答の平均値が7.9、中央値は9.0であった。自由回答分析では、対象ファイルに含まれる総抽出語は609語（使用語数262）であり、何種類の語が含まれるかを示す異なり語数は、175語（使用語数115）であった。また、出現回数の平均は2.28、出現回数の標準偏差は3.04であった。出現回数の多い上位10語は、「思う（20）」「子ども（18）」「色々（11）」「必要（11）」「人（8）」「知る（8）」「交流（5）」「地域（5）」「関わる（4）」「大切（4）」であった。階層的クラスター分析の結果、5つに分類され、クラスター名を【障害の有無で隔たりがない機会】【関わりで得られる経験】【地域の多様な友達の存在】【自然な触れ合いが大切】【子ども同士が知り合う】とした。続いて、一般的な語である「思う」を除外した上で外部変数を用いた共起ネットワーク分析では、機会あり・高得点群、機会なし・高得点、機会なし・低得点群の3群に関連した語は、「大切」「子ども」「必要」であった。また、機会あり・高得点群と機会なし・高得点群に関連した語は、「友達」「発達」「人」「障害」「多様」「知る」「同士」「良い」「関わり」「大事」「触れ合い」「学ぶ」「地域」「関わる」「有無」「交流」「多い」「色々」であった。また、機会なし・高得点群と機会なし・低得点群に関連した語は、「色々」「難しい」であった。なお、機会あり・低得点群に関連した語は、みあたらなかった。

5. 考察

多くの地域住民は医ケア重症児に関わったことがないものの、障害の有無に関わらず共に遊ぶ機会については、子どもたちに【関わりで得られる経験】があり、【子ども同士が知り合う】だけでなく、【障害の有無で隔たりがない機会】は、【地域の多様な友達の存在】を知ることになるため、日常的に【自然な触れ合いが大切】と考えているといえるだろう。一方で、機会なし群に関連した語の分析から、地域で共に遊ぶことの難しさが推察された。就学前の医ケア重症児のインクルージョンを推進するためには、共に遊ぶ上での困難さを検討し、子どもたちの遊びを大切にできる環境を地域で構築する必要性が示唆された。

参考文献

障害児通所支援に関する検討会(2023)：障害児通所支援に関する検討会報告書—すべてのこどもがともに育つ地域づくりに向けて—。
樋口耕一(2020)：社会調査のための計量テキスト分析(第2版)。ナカニシヤ出版。
望月太敦・小澤温(2024)：未就学の重症心身障害児と同年代の健常児の交流における実態の解明—東京都内の児童発達支援事業所等の職員へのアンケート調査から—。発達障害研究45(4), 332-345。
望月太敦,小澤温(2024)。幼児期の医療的ケアのある重症心身障害児におけるインクルージョンの検討—児童発達支援事業所等に通う医療的ケアのある重症心身障害児の保護者へのインタビュー調査から—。社会福祉学65(1), 72-86。